

『日本蒙昧前史』講評

選考委員代表 川上弘美

磯崎さん、本日はおめでとうございます。

受賞作『日本蒙昧前史』は、まず題名に心がひかれます。

いったい「前史」とは、何の前史なのか。このユーモラスなようなまた皮肉なような題からひもとかれるのは、実際のところ、はてどんな小説なのだろうか、まず本をはじめて手に取った時に、わくわくしました。

書かれているのは、昭和の後半にあった実際の事件や、実在する人々について。けれど、たとえ実在のことごとについて書かれていたとしても、この小説の中にあるそれらのことごととは、事実とはことなった位相のものとなっています。そこが、この小説のなによりもすぐれたところなのだと思います。

たとえば、一九七〇年に開催された大阪万博で、太陽の塔にたてこもった青年の逸話。あるいは、一九七六年に生まれた五つ子ちゃんの逸話。横井庄一さんのこと。田中角栄と福田赳夫のこと……。事実即したことが語られているようで、実はそれは作者磯崎さんの体を通して変容し、はつきりと小説的な言説となった語りなのです。ですから、選評で筒井康隆さんが書かれているように、『この作品はフィクションです』と作者が言っている以上は事実を下敷きにしたフィクションとして楽しめばいい」ということにつきるのです。

ただ、事実を下敷きにしたフィクションには、難しさもあります。皆が知っていることだからこそ、何もないところから組み立てたフィクションよりも、読者の読み方は厳しくなる。けれど、この小説を読みながら、わたしは何回も「そうだ、こんなことがあった」という、確認の喜びを感じると同時に、「こんなこともあったけれど、まるで初めて読むことのように新鮮で面白い」とも、強く感じたのです。ここに、磯崎さんの小説家としての手腕が如実に示されているのだと思います。

選考の前にこの小説を読み、あらためてその後読み返しながら、はっとしたことがあります。それは、本書の題の中にある「前史」という言葉から連想されたことです。

もしかすると、小説とはなべて、「前史」をその中にふくむものなのではないだろうか、という事です。

小説家は、今現在のことを書きます。表面上は古代のことを描いていても、未来のことを描

いていても、それらはつまり、今この時この瞬間に、作者自身が何を感じ何を考えているかということを表現するための器としてたまたま選ばれた見かけの時代です。どんな時間、どんな場所が舞台だったとしても、最後に立ち戻るのは、小説家自身の「今」なのです。

けれどその「今」には、必ず「今」の前史が存在します。考えてみれば、自分が小説を書く時も、書こうとする「今」の前史を、常に心の中によりがえらせているような気がします。たとえその前史が、結果的に小説の中には書かれなかったとしても、書こうとする「今」の前史を辿ることによって、ようやくわたしは「今」を表出しはじめる。そんな過程が、「小説を書く」という営為の中には、必ず含まれているのです。

とどのつまり、「今」を描くにあたって、いつも小説家は「前史」に思いをはせざるを得ないのです。最初にこの小説の題名に心ひかれたのは、たぶんそれゆえのことであったのです。

『日本蒙昧前史』という、小説にとって本質的な題を持つ本書を書き終えたこのちに、磯崎さんがどのような新たな小説を書いてゆくか、楽しみでなりません。本日は心よりお祝い申し上げます。

(令和二年十月十四日)